

松波むかし語り ここに住み続けて

その48

今回のお客

医療法人志方記念会 三木クリニック院長の

みき えいし
三木 英司 さん 83歳3丁目

“高齢者の心構えですか？ こまめに身体を動かすことだと言っています！”



先生は、三木クリニックを経営しながら長く母校、東大医学部の非常勤講師も務め後輩の指導にあたってこられました。ご専門は糖尿病。渡された冊子によれば、先生のモットーは「自分は最もよく言うことをきく実験動物である」とか。「患者さんに打つ注射や患者さんが飲む薬は全部自分で飲んでみるということで、今7種類、9錠の薬を飲んで」おられるとあります。頭の前からつま先まで、医者として生きておられることにまず脱帽です。

先生は昭和5年、姉ヶ崎のお生まれです。「今放映中の大河ドラマ『軍師官兵衛』に兵糧攻めに遭う三木城が登場しますが、その隣りの志方城が家内の方で、『医療法人志方記念会』の『志方』はそこから始まります。つまり先祖は姫路の近く、播磨の国から元禄の頃千葉へやって来て商人になりました。祖母の出た家は久留里藩の儒者といいますが、明治になると失業し、横浜の医師、ヘボン(ヘボン式ローマ字のヘボンです)の門をたたいて千葉で眼科医となります」。先生も、眼科医になるか内科医になるか考えたといいますが、「医学全体がわかる」というので内科医を選択されたということでした。

「クリニックは栄町にあるので駅からも近く便利なのですが、糖尿病患者が夜になると酔っ払いに囲まれるような環境でした。そこで20床あった入院ベッドを4床に減らして、有床診療所としました」。そういえば中央区の都市中心部では、なかなか大きな病院が成り立ちにくいのだとか。でも千葉は病院に恵まれているほうだと思うのですが、とうかがってみると、「千葉市内はたしかに医者の数も多いのですが、県全体でみると千葉県は埼玉県と並んで医者の少ない県なのです。医者の適切な配置に問題がありますね」。

松波の印象をうかがってみました。「西千葉駅前には、いまも千葉大と並んで東大の一部が残っていますが、昭和18年に第二工学部ができてからです。そこに恩師がおられたので、砂利が敷いてあるだけの広々とした西千葉の駅に降りてよく通いました。そのため戦時中から松波は知っていました。静かでいい住宅地で学者が沢山住んでいました。住む家を探すときに、千葉市中を探してここに決めたのです」。長く千葉から文京区の東大に通われたのですか？ 「当時は電車が混む時代で、車内に乗客を押し込む“押っぺし”とか、逆にドアを閉めるために、しがみつくと乗客をはがす“はがし屋”というアルバイトがいたほどでしたから。それだけに座ってゆける千葉駅は便利でした」。なつかしい話ですね。「当時のこのあたりは商店街だったですね。富士屋豆腐店、松波ストア、向かいで燃料を扱っていた京葉燃料店をはじめ八百屋、魚屋、薬屋が軒を並べてにぎやかでした」。

先生は千葉県医師会の健康教育委員長を15年務められたとのこと。健康とはどんな状態を指すのですか、とうかがうと「その人が、人の手を借りずにその人の役割を果せる状態」という答えが返ってきました。「糖尿病患者は昔は50万人と言われ、案外珍しい病気でした。それが今では1000万人とも言われます」。なぜそんなに増えたのでしょうか？ 「食事の洋風化と、体を動かさなくなったからでしょうね。今日本中で、昔の木こりのように、大汗をかいて仕事をする人がいるのでしょうか。私は高齢者のみなさんに、『痛い痛いと思うでしょうが、こまめに身体を動かさなさい』と言います。私も最近、腰痛体操を始めたのですが、調子がよくなりました」。7月初旬は小笠原へ、貴重な動植物を探しに行かれるとか。その旺盛な探究心と行動力は、まさに今も青春そのものです。